

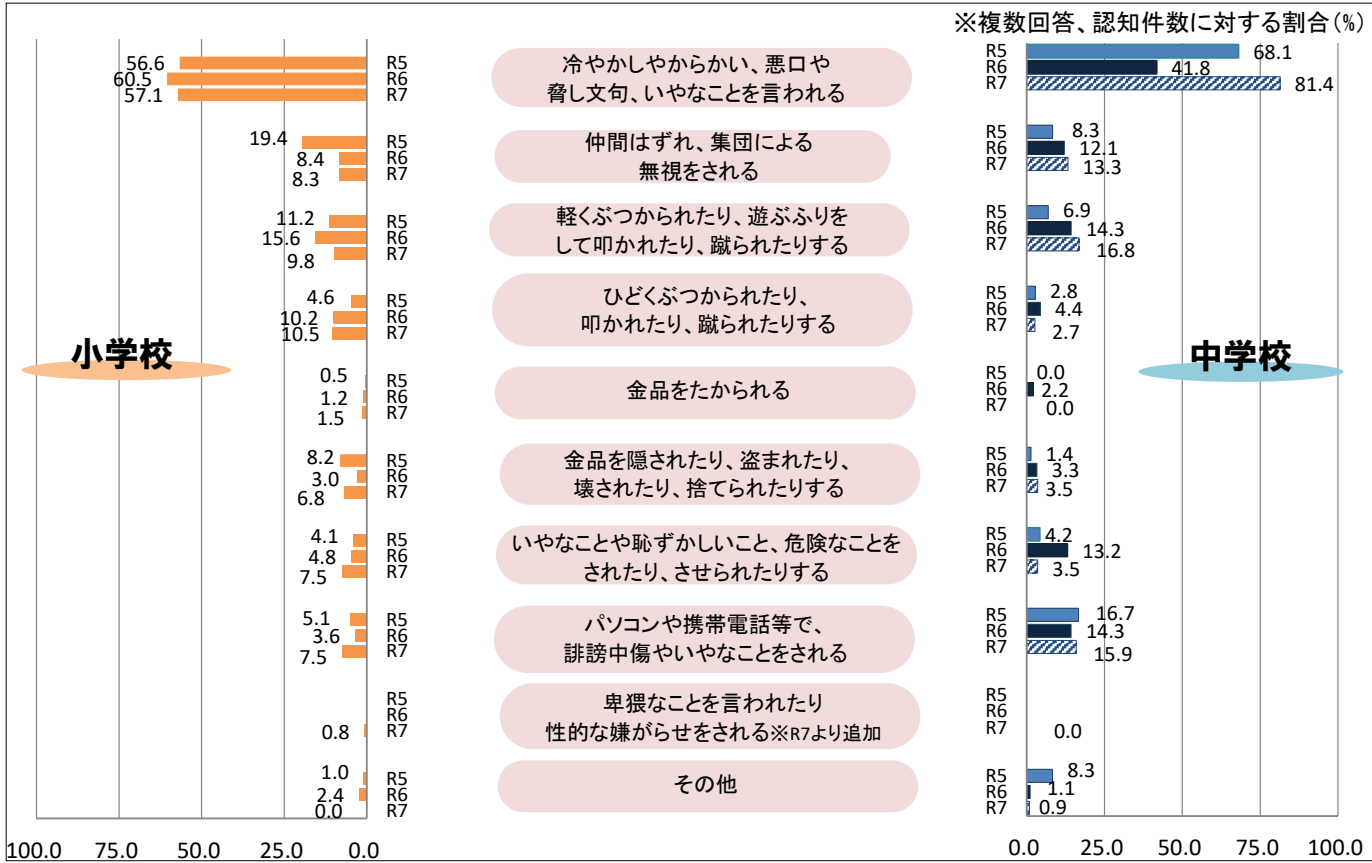
東海市のいじめの状況等

資料1

1 いじめの件数・解消状況

年度	小学校										中学校							合計	
	認知 件数	内訳						解消済	解消に向けて 取り組み中	他校への転 校、 退学等	認知 件数	内訳			解消済	解消に向けて 取り組み中	他校への転 校、 退学等	認知 件数	解消済
		1年	2年	3年	4年	5年	6年					1年	2年	3年					
R2(2020)	256	53	42	46	40	36	39	224 (87.5%)	32	0	160	97	37	26	133 (83.1%)	27	0	416	357 (85.8%)
R3(2021)	424	62	57	84	103	58	60	382 (90.1%)	42	0	123	64	45	14	101 (82.1%)	22	0	547	483 (88.3%)
R4(2022)	215	30	40	42	36	39	28	193 (89.8%)	22	0	117	62	34	21	103 (88.0%)	14	0	332	296 (89.2%)
R5(2023)	196	26	33	35	39	30	33	169 (86.2%)	27	0	72	35	20	17	57 (79.2%)	15	0	268	226 (84.3%)
R6(2024)	167	20	28	31	21	42	25	139 (83.2%)	28	0	91	53	28	10	81 (89.0%)	10	0	258	220 (85.3%)
R7(2025)	133	20	13	22	17	32	29	98 (73.7%)	35	0	113	48	41	24	86 (76.1%)	27	0	246	184 (74.8%)

2 いじめの態様



【いじめ防止等対策委員会の意見等】

〇いじめ防止には、子どもが自分の気持ちに気付き、ストレスに対処し、SOSを出せる力を育てる心の教育が必要であり、教員も心の変化に気付く力を高めることが求められている。子ども自身がSOSを出す力や相手の気持ちを考える力を育てることが、いじめの未然防止につながる。

〇「苦痛があればいじめ」という定義は現場で判断が難しい。被害者と加害者の間に力の不均衡があったり、事案に連続性があったりというところを基準にすることで、より実態に沿った判断が可能になるとされている。

〇いじめは成人後の心身にも影響を残し、重大事件の背景になることもあるため、早期に把握し適切に対応することが不可欠である。

〇SNSを使った誹謗中傷や集団でのつるし上げの案件が増えてきた。学年全体を対象とした大規模LINEグループが作られる事例もあり、そこで、暴言や過剰な正義感による攻撃が起こりやすくなっている。

〇AI画像生成の悪用やオンラインゲームの課金トラブルなど、学校外で起こる見えにくい問題が増え、早期発見が難しい状況が生まれている。

〇アンケートでのいじめ発見件数が減少しており、方法の見直しが必要である。担任や保護者に相談ができている子どもたちが多いが、被害が深刻な子ほど訴えられないこともあるため、誰にでも相談しやすい環境づくりが重要である。

〇特性理解が不足していることが冷やかしかからかいの背景にあり、通常の学級と特別支援学級の認知件数を分けて分析する必要があると指摘された。

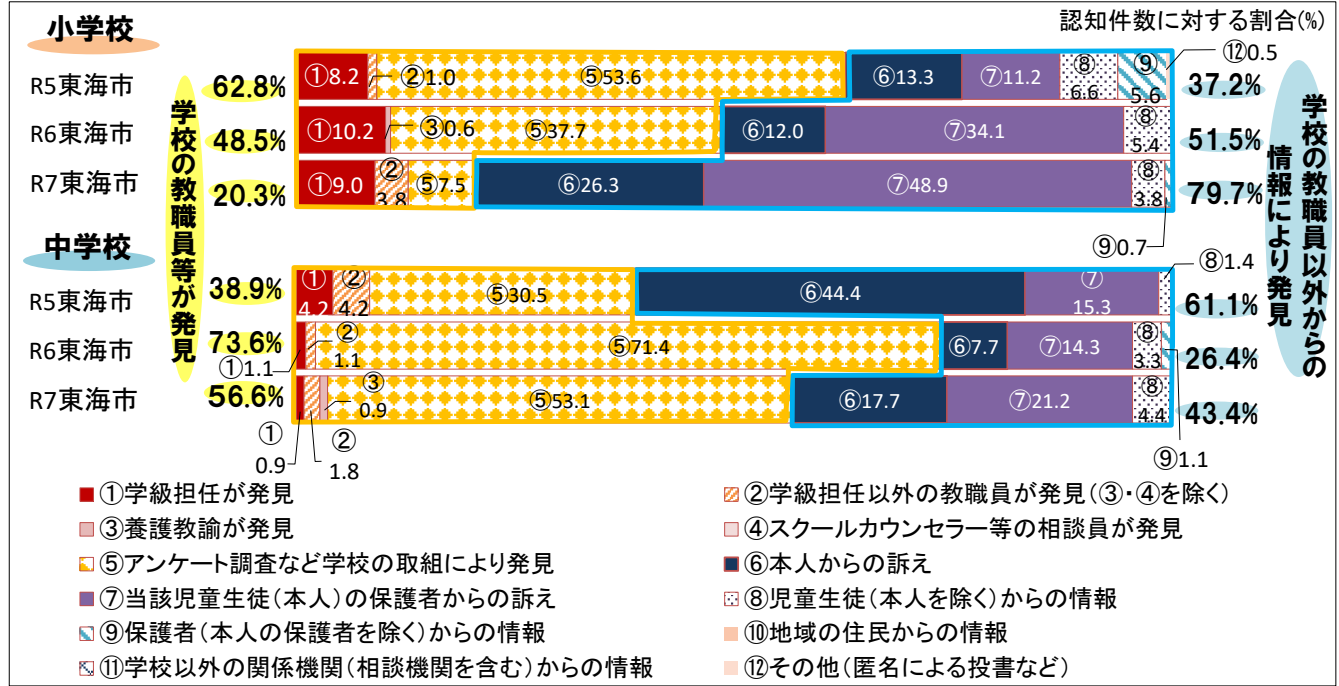
〇障がいや特性への理解を広げるため、学校と福祉関係者が連携し、特性理解の啓発を強化する必要がある。

〇幼児期から感情の言語化や対人経験、親子の信頼関係を育てることで、いじめを未然に防ぐ土台が形成されていくと考えられる。しかし、デジタル依存により対人経験が不足し、傷つきやすく立ち直りに時間がかかる子が増えている点が課題となっている。

〇保育園・幼稚園・学校が連携し、成長段階に応じて心の基盤となる力を継続的に育てる体制が必要とされている。

〇教員が子どもたちの変化に気付くことが早期発見の鍵となる。しかし、教員同士での気付きを共有する姿が減り、いじめ発見率が低下している可能性も懸念される。日常的に複数人で子どもたちの様子を見守り、変化を共有する組織的な意識改革が求められる。遅刻や体調不良などの初期サインを見逃さず、教員間で共有することが早期対応につながる。

3 いじめの発見のきっかけ



4 いじめられた児童生徒の相談の状況

